

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 21 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26330379

研究課題名(和文)映像アーカイブを活用した地域イメージの循環的生成に関する実践的研究

研究課題名(英文) Practical study about cyclical generation of local images utilizing image archives

研究代表者

北村 順生 (KITAMURA, Yorio)

立命館大学・映像学部・准教授

研究者番号：20334641

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：地域の映像アーカイブを教育目的で活用するための方策についての知見を得た。授業実施時の方法論としては、映像と合わせたモノの併用や多様な年代の参加の有効性を確認した。地域の映像アーカイブを教育現場で活用する可能性としては、学校現場と地域社会との連携を深めていくこと、生徒たちの関心や意欲を引き出す契機となること、教育のICT化の進展にともないデジタル教材の一環として活用すること、映像メディアに関するリテラシー涵養に結びつくこと、などについて可能性が示唆された。一方で、技術的環境の整備、適応する授業デザインの精緻化、教材となる映像資料のパッケージ化、などの面で実践的な課題があることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：I got the knowledge how to utilize local image archives in an education purpose. For methodology, I confirmed the effectiveness of using materials with images and the participation of various generations in the class. For possibility to utilize local image archives in an educational, some points became clear. Using local image archives in education could make tight cooperation between school and local society, it might be an opportunity for students to rouse interest and the will of study, it could be utilized as a digital text in the age of ICT education, and it could cultivate literacy of image media. On the other hand, it became clear that there are practical problems to solve that technical environmental maintenance, the elaboration of the teaching design, and making the package of image materials.

研究分野：メディア社会学

キーワード：デジタル映像アーカイブ 活用 情報社会学 教育 地域 メディアリテラシー

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) マスメディアを通じた地域表象のステレオタイプに対する批判的研究

地域表象における認識論的な非対称の権力関係の問題については、エドワード・サイードが西洋から東洋への眼差しの中に存在する異文化理解の様式として「オリエンタリズム」を論じて以降、その後のポストコロニアル理論の中でも中心的に論じられてきたものである。この問題は、近代におけるグローバルな地域間関係の問題として主に捉えられてきたが、実はこれと同様の構造は国内の諸地域間にもみてとることができる。たとえば岩淵功一らが『沖縄に立ちすくむ』で論じた沖縄の地域表象や、黒田勇が「内なる他者<OSAKA>を読む」で焦点をあてた大阪イメージのように、国内の地域文化に関する表象においても、画一的で偏見に満ちた地域イメージが存在している。こうしたステレオタイプの再生産においては、マスメディアが大量に垂れ流す地域イメージの影響は大きい。とりわけ日本では東京一極に集中したメディア産業の構造の中で、地方文化については表象される割合が極端に少ないが、取り扱われるとしても中央＝東京からのステレオタイプの視点に絡め取られた画一的なものに陥りがちである。本研究においては、このようなマスメディアを通じて広がる地域イメージのステレオタイプを克服し、オルタナティブな地域間の情報交流のための方策を検討し、ことを目的としている。

### (2) 地域メディア・市民参加型メディアの展開に関する研究

近年の情報通信技術の進展を背景として、ケーブルテレビ等でのパブリック・アクセスの展開や非営利法人を含めたコミュニティ放送の増加、SNSなどのインターネットを用いた個人による情報発信など、従来のマスメディア型コミュニケーションとは異なる多様なメディア活動が活発化している。こうした新しいメディア環境に伴う変化については、河井孝仁・遊橋裕泰『地域メディアが地域を変える』や松本恭幸『市民メディアの挑戦』、その他多くの研究において分析が行われているが、本研究ではこれらの地域メディアや市民参加型メディアに関する分析成果を参照しつつ、自ら教育研究プログラムを実施していくことで、地域文化に関する情報発信のあり方や具体的方法等について実践的に検証していくことを目的としている。

### (3) 地域間コミュニケーションに関する交流実践の蓄積

上記のような学術的背景1および2のもとで、研究代表者は連携研究者らと共同で地域間コミュニケーションについての実践型教育研究プログラム「ローカルの不思議」を2001年度より継続的に実施してきた。これは全国9地域・15校の大学生や高校生の間で展

開される交流授業のプログラムであるが、最初に交流対象地域に対して抱いている地域イメージのステレオタイプの歪みを自覚化した上で、自らの暮らす地域の実情を地域に内在的な視点によって捉えた映像作品を制作・交流し、オルタナティブな地域文化の交流を図るという活動である。このプログラムを実践する中で明らかになったことは、地域住民であっても他者のまなざしによる画一的なイメージから逃れられるわけではなく、むしろそうしたステレオタイプを自ら内面化してしまっている状況も多いことだ。したがってオルタナティブな地域文化像というものは、日常生活の中で自動的に生成されるものではなく、プロジェクトで出会う他者との関わりの中で自らの地域文化について意識化し、他者へと伝えていく表現を織り成していく中で、はじめて具体的な文化表象として形をなすことになる。本研究においては、このような視点から「ローカルの不思議」プロジェクトを再構成し、異文化における他者との交流過程の中で、地域イメージに対するステレオタイプを克服して自らの地域文化をどのように理解していくことが可能なのか、その地域をどのように表象し、どのように他者へと伝えていくことができるのかについて、実践的に検討していく。

### (4) 地域映像アーカイブの実践

新潟大学を中心に、新潟県内に残された写真やフィルムなどの映像文化の整理と保存、活用を行う「にいがた地域映像アーカイブ」を研究代表者らのグループで実施してきた。その成果は、原田健一・石井仁志編『懐かしさは未来とともにやってくる』にまとめられている。

## 2. 研究の目的

地域文化に関するナショナルで画一的なステレオタイプを克服しつつ、地域の視点に根差した地域文化の自己像を形成していくために、地域に残された映像資料の集積である映像アーカイブをどのように活用していくことが可能かを明らかにする。一方で、そうして得られた地域を表象する独自の映像を新たに地域映像アーカイブへと整理、追加、蓄積していくことで、さらにそれらを活用して新たな地域イメージを生成していくような循環的な地域イメージのサイクルのモデルパターンを作成する。

具体的には、「ローカルの不思議」プロジェクトにおいて参加学生たちが地域の図書館や博物館、新聞社や放送局などの地域メディア、市民による文化活動や社会活動のサークルなどのさまざまな文化的団体や組織と連携しながら、映像アーカイブを活用しつつ自らの地域について調べて映像の形態に表現していく。また、その結果、参加学生たちによって作成された自らの地域に関する映像作品について、映像アーカイブとしての保

存、蓄積を行っていく。このような循環的な活動の中で、地域の自己像の発見・再構築において、映像アーカイブをどのように活用していくことが可能なのかを実践的に明らかにしていく。とくに、学校教育における地域の映像アーカイブの利活用を中心に、公民館等の社会教育も含めながら、教育目的における映像アーカイブの利活用に関して、その可能性と課題について実践的に明らかにしていくことを目的とする。

### 3. 研究の方法

#### (1) 「ローカルの不思議」プロジェクトにおける地域映像アーカイブ活用の試行

「ローカルの不思議」プロジェクトを進展させ、地域の図書館や博物館、新聞社や放送局などの地域メディア、市民による文化活動や社会活動のサークルなどのさまざまな文化的団体や組織と連携しながら、地域に残された映像資料を活用して地域の自己イメージを映像に表現していく活動を、新潟地域において試行する。その結果、地域の映像アーカイブが地域文化の再発見にどのように影響を与え、地域イメージの循環的生成にどのように貢献しうるのかについて検証を行う。

#### (2) 活用の観点からみた地域映像アーカイブの検討と改良

映像アーカイブの評価の観点としては、検索のしやすさやメタデータの付与方法など、アーカイブの閲覧者・観察者の立場、あるいは地域映像アーカイブを活用した研究者からの評価点が優勢であった。

本研究においては、映像アーカイブを新たな映像イメージの生成のためのツールとして活用していこうとする観点から、従来の映像アーカイブの評価軸とは異なり、利活用の観点からみた映像アーカイブの評価方法を検討していく。とくに、学校教育および社会教育における教育目的における地域の映像アーカイブの活用について実践的に明らかにする。

具体的には、新潟県内の小学校および社会教育施設と協力し、学校における授業や公民館における住民参加のワークショップを実施し、その有効性について検証すると同時に、そこで生じてくる課題や問題等を明らかにしていく。

### 4. 研究成果

#### (1) 地域映像アーカイブの活用に向けた方法論

地域のデジタル映像アーカイブをワークショップの形で活用していく際の有益な方法論が明らかとなった。

##### モノの併用の有効性

十日町ワークショップにおいては、十日町博物館が所蔵する民具を数点準備し、映像を視聴する前のアイスブレイクとしてその名

称や用途などについて参加者同士で議論する時間を設けた。また、小学校での授業実践ワークショップの中でも、授業の導入部で民具を出して生徒たちにその名称や用途を尋ね、昔の生活への想像力を喚起するケースもあった。

かつて日常生活のそここで使われていたモノを提示することで、そのモノに馴染みのあった人たちは自ずと自らの経験を語り出す。彼らにとってモノは単なる物体に留まらず、かつて過ごした時間や記憶と密接に結びついたものとなっているため、いわばモノを契機に記憶が喚起されるのである。こうしたプロセスを経て映像視聴を行うと、参加者たちは映像の中に映されたさまざまなモノに注目するようになり、それらと結びついた記憶の語りが増えるようになるのだ。

一方で、そうしたモノに馴染みのない若い世代にとっても、眼前に存在する見慣れない物体に関する他者の語りを聞くことで、映像の中に登場するさまざまなモノに対する注意力が高まっていくように思われる。モノに対する注意力を高めることで、高齢者層と若年者層の双方の映像に対する関心を高めていく効果があるのである。

##### 年代を越えたコミュニケーションの効用

デジタル映像アーカイブの映像は、高齢者層にとってはかつて経験した時代のものである場合が多く、若年者層にとってはまったく未知の時代のものが多い。こうした経験や知識に関して大きなギャップがある世代が混在することが、ワークショップにおける語りを活性化させるために重要なキーになると思われる。

例えば公民館等で開催する映像アーカイブのワークショップを開催した時に、参加者は古い映像に郷愁をもつ高齢者が多くなる。高齢者同士が共同で古い映像を見た場合に、彼らの間には同じ時代を経験してきたために共有している知識も多く、その共有知識について高齢者同士ではあえて話題には上らない。しかしそこに若年層が存在していると、映像に映し出されているものや出来事ひとつひとつが未知のものであるので、高齢者層から若年者層への語りの動機が生まれる。高齢者層が多いワークショップにおいて、学生が聞き役として存在すると、彼らを媒介として一気に語りが増えるのはそのためである。

あえて異なる世代が混在する形でワークショップ参加者を構成することは、豊かな語りを引き出すための一つの方策として有効だと考えられる。

#### (2) 地域映像アーカイブの教育活用の可能性

地域映像アーカイブを活用した一連のワークショップ実践の中で、とくに教育的側面において高い可能性が認められた。以下、そのうちの4つの点に絞って触れていきたい。

## 地域社会との連携

現在の学校教育の現場では、学外から学習支援ボランティアやゲストティーチャーを招き、地域の教育力を活用する動きが盛んに行われている。地域映像アーカイブの映像資料を授業で活用していく際には、こうした地域社会との連携と親和性が高い。

現在、教壇に立っている若手世代の教員が、昭和の時代の生活を自ら体験している場合は少ない。多くの学校では、映像資料に残されているような暮らしを体験しているのは校長などの管理職だけであり、現場の教員自身が映像資料について語るための知識や経験はそれほどないのが実情である。そのため、地域から当時の様子をよく知る高齢者を招き、体験談を子どもたちに向けて話すことが有効になる。小学校での授業実践ワークショップの中でも、地域からゲストティーチャーを招いたケースや、祖父母参観日にワークショップ実践を行った事例もあった。いずれの場合も、話者となったゲストティーチャーや参観者は積極的に子どもたちに語りかけ、子どもたちも興味をもって話を聞いていた。さらに、地域社会との連携は地域から学校への方向だけに留まらない。授業の後に、自宅で子どもたちが昔の人々の暮らしについて父母や祖父母に訪ねて会話が行われるという事例が複数生じている。地域映像アーカイブの映像資料をきっかけに、地域から学校へというベクトルと、学校から地域に向けてというベクトルの双方向において、世代を超えたコムにケーションが発生しているのである。

## 関心や意欲を引き出すきっかけ

今回の一連の授業実践においては、総合的な学習の時間の中での実践が多かった。単元が細かく設定されている一般の教科とは異なり、個々の教員が自由に目標やカリキュラムを設定できる総合学習の方が、新しい教材を使いやすいという事情は容易に推察できる。

ただし、総合的な学習の時間ではあっても、例えば写真の読み解きや読み解いたものを言語的に表現するなどの形で、国語と強い結びつきを持たせる実践もあった。また、地域学習などは社会科との関係が深いし、その他のさまざまな教科でも映像資料を活用していくことは可能であるだろう。

それらの教科をまたいで映像資料の特性として指摘できるのが、言語的な知識とは異なり、視覚的に直感的に理解できるということである。例えばかつての雪国の生活の大変さについて、言葉で理解しようとしてもなかなか実感を持ったものになるのは難しい。しかし写真に写された雪国の様子をみれば一目瞭然であり、映像が直感的に訴えかけてくることになる。こうした映像のインパクトの強さは、学習者たちの対象に対する関心や意

欲を引き出すために有効である。教員向けワークショップで作られた授業デザインで多くの教員グループが指摘していたように、映像資料を学習の初期の段階で見せ、教員がさまざまな問いかけをすることで、子どもたちが対象に対する関心や意欲を強く持つようなきっかけとして有効であると考えられる。

## ICT教育のデジタル教材

情報化の進展とともに、ICTを教育に活用していく動きが進んでいる。とりわけ近年では、タブレット端末が急速に教室の中で普及しており、文部科学省では2020年までにはすべての学校で一人一台ずつタブレット端末を導入することを目標としている。今回のワークショップ実践を行った小学校でも、全員に一台ずつ配布するまでには至っていないが、授業においては一人一台使用できるような環境を整備している。そのため、授業実践の中では、タブレット端末に映像アーカイブの映像をあらかじめインストールしておき、授業中に小グループでタブレット端末を操作して映像を閲覧して、気付いたことや分かったことを議論して発表するスタイルがみられた。このようなタブレット端末などのデジタル教材のコンテンツとして、地域映像アーカイブの映像資料は有効であろう。大量の写真を印刷して配布することは労力やコストの面で難しいが、デジタル・データとしてタブレット端末にインストールすることはそれほどハードルは高くない。現在、デジタル教科書としてさまざまなコンテンツの開発が行われているが、地域の独自性をもった教材として映像アーカイブはICT教育時代に親和性の高いものであると言える。

## 映像資料の文脈・意味の探索

映像資料の教育での使用自体は、従来から一般的に行われてきたと言える。冊子体の教科書や副教材においても、さまざまな写真が掲載され、視覚的な事象の理解を促している。しかし、こうした写真の多くはその意味付けがあらかじめ固定化されているものであり、特定の意味を付与されたものとして、基本的に多様な読みを許容するようなものではない。例えば原子爆弾が投下された際のきのこ雲の写真は、人類を豊かにするはずの科学文明が巨大な核兵器を生み出すというジレンマを象徴するイメージとして、あるいはきのこ雲の下で凄惨な被爆者たちの姿があることを想起させるイメージとして受け取られることを前提としている。従来の教材として使用されている映像資料は、特定の文脈の中で、特定の視覚的知識やイメージを伝えるものとして機能してきたと言える。

しかし映像アーカイブの映像資料は、基本的に日常的な風景や情景を写した映像が大量にデータベース化されたものである。それらの映像からどのような意味を読み取るかは、あらかじめ明確であるわけではない。

それは、映像アーカイブの大量の映像の中から、どの映像とどの映像を比較するかに応じて異なってくる。どのような文脈のもとでどのように映像を読み解いていくのかは、映像を見る側に開かれた存在なのである。こうした能動的な映像資料との関わりのある方は、対象の文脈自体をメタレベルとして考察していくという意味で、いわゆるメディアリテラシーの能力とも連続しているものと言えるであろう。

### (3)地域映像アーカイブの教育活用の課題

地域映像アーカイブの活用に関して、ワークショップ実践の結果を踏まえ、とくに教育面で活用していく際の課題を3点に絞って述べる。

#### 技術的環境

地域映像アーカイブを教育現場で活用していこうとする際の課題についてもいくつかの点が指摘できる。その一つは、技術面での環境の整備である。技術についてはハード面と人材面の両面から考えることができるが、ハード面では前述のようにタブレット端末などのデジタル機材の普及が急速に進んでいるが、まだまだ十分だとは言えない。また、人材面での課題を考えると、教員のデジタル能力には個人や年代間での格差が大きく、デジタル機材やデジタル・データの取り扱いには不慣れな場合が多いのが現状であろう。この点で過渡的な措置として重要になるのが、教員をサポートする支援体制の整備である。南魚沼市の場合は技術サポーターが定期的に学校で教員を支援する体制が整っているが、このような体制を整備することが、ここの教員のデジタル能力の育成とあわせて重要なことになるであろう。

#### 授業デザインの変容

ICT教育に関して一般的に言われることであるが、デジタル教材の導入は単に教材や機材がデジタルに変わるというだけではなく、教室における学びの内容や質が大きく変わる可能性がある。例えばタブレット端末が一人一台配布され、常に携帯するような状況になった場合、子どもたちは必要な知識の多くについてタブレット端末を通じて自ら調べて自ら知ることが可能になる。従来のように、教室の授業で教員が新しい知識を子どもたちに分け与えるのではなく、子どもたちは自宅であらかじめ基礎となる知識に触れ、授業では他の子どもたちとの間で議論をしたり発表をしたりすることが中心となっていくであろう。また、固定的な知識をただ覚えるのではなく、他者との交わりの中で課題を見つけ、新たな知識を発見し、解決策を見出していくというような授業方法へと変わっていく。

近年、「反転学習」や「アクティブラーニング」というキーワードで語られることの多

いこうした授業の根本的な変容は、映像アーカイブを授業で活用する際にも当然あてはまるものであろう。こうした授業デザインの中では、教師の役割も大きく変化する。教師は、新しい知識を子どもたちに伝える役割から、子どもたちが自ら疑問や課題、発見を通じて学びを構成していく手助けをする役割へと変化していくことになる。しかし、こうした新しい役割に対応した授業のデザインについては、さまざまな形で試行錯誤が重ねられている段階であり、教員個々の適応能力にも格差がある。新しい授業スタイルに応じた授業デザインの開発が必要となる。

#### 映像資料のパッケージ化

映像アーカイブが大量の映像資料をデータベース化している点は前述のように大きな特徴であるが、この映像の分量の多さは実際の授業実践においてはデメリットともなり得る。新潟地域映像アーカイブの場合、写真だけでも3万点以上を所蔵しているが、だからといって授業教材としてその3万点を対象として扱うのは現実的ではない。3万点の写真を順に閲覧していくことはそれだけでも膨大な時間を要するものであり、多忙な現在の教員がそれだけの時間を費やすことは不可能に近い。また、子どもたちにとってもあまりに大量の写真を見せられると、どの写真をどの写真と比べてみていけばいいのかも決められない状況に陥ってしまう。実際に授業実践で映像資料を教材として活用していく際には、その目的に応じた映像を数十枚単位で絞り込んで、全体が何とか見渡せる程度の分量にしていくことが必要である。南魚沼市の授業実践の場合は、基本的に教員向けワークショップと同様の6つのカテゴリーの合計70枚の写真を使用した。

さらに将来的には、各学年や教科、単元に即した使いやすい映像資料のパッケージをあらかじめ作成しておき、教員が必要に応じてそれらの映像のパッケージを選択して活用するという形が必要になるであろう。もちろん、それらの映像資料のパッケージは固定的なものではなく、地域によって多様なバリエーションがあつていいし、柔軟に追加や入れ替えなどができる形であるべきであろう。そのような実際の授業運営に即した形で映像アーカイブを整備しカスタマイズしていくことが、今後の映像アーカイブの活用を進めていくためには重要な作業であると思われる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

北村順生、地域デジタル映像アーカイブの教育活用に関する実践的研究：その可能性と課題、デジタルアーカイブ学会誌、査読無、

2 卷 2 号、2018 年、83-86

北村順生、地域映像アーカイブの教育活用に関する事例研究：南魚沼市実践の報告から、人文科学研究、査読無、138 輯、2016 年、177-195

北村順生、地域映像アーカイブの活用に関する一考察：十日町情報館ワークショップ実践の試み、人文科学研究、査読無、136 輯、2015 年、109-124

〔学会発表〕(計 4 件)

北村順生、地域デジタル映像アーカイブの教育活用に関する実践的研究：その可能性と課題、デジタルアーカイブ学会第 2 回研究大会、2018 年

松谷容作・郷田真理子・北村順生、モノと対話すること：アーキビストの目と手を編制する、デジタル・アーカイブス・地域映像サミット、2017 年

北村順生、映像アーカイブの活用による地域コミュニティの文化的再生、第 7 回横幹コンファレンス、2016 年

Yorio Kitamura、Using Digital Visual Archives in Media Education、Media Education Summit 2015、2015 年

〔図書〕(計 2 件)

原田健一・水島久光・浅岡隆裕・石田佐恵子・石田美紀・板倉史明・榎本千賀子・小河原あや・北村順生・キム=ジュニアン・佐藤守弘・前川道博・松谷容作・椋本輔、学文社、手と足と眼と耳：地域と映像アーカイブをめぐる実践と研究、2018 年、313

原田健一・榎本千賀子・北村順生、南魚沼市・新潟大学ミュージアム連携ネットワーク、光の記憶：南うおぬま地域映像アーカイブ、2016 年、127

〔その他〕

ホームページ等

「にいがた地域映像アーカイブ HP」

<http://www.human.niigata-u.ac.jp/ciap/>

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

北村 順生 (KITAMURA, Yorio)

立命館大学・映像学部・准教授

研究者番号：20334641